

丹生遺跡群（第14地点）

県道坂ノ市中戸次線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

序 文

本書は、大分県教育委員会が県大分土木事務所の依頼により実施した県道坂ノ市中戸次線道路改良事業に伴う丹生遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は、中世、豊後に覇を唱えた大友氏の城下町である中世大友府内城下町跡をはじめ、豊後国分寺跡、城原・里遺跡などが所在し、古代以降、現代に至るまで大分県の中心地として栄えてきました。

丹生遺跡群の調査では中世の集落跡が確認でき、近年、周辺の発掘調査の成果と合わせて本地域における中世の社会を理解する上で貴重な発見が得られました。本書が埋蔵文化財に対する保護や啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力いただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成22年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 佐 藤 英 一

例 言

- 1 本書は県道坂ノ市中戸次線道路改良事業に伴い、大分県教育委員会が県大分土木事務所の依頼により実施した大分県大分市大字丹川字伊佐甲・原に所在する丹生遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成20年度に大分県教育庁埋蔵文化財センター職員の管理のもと、九州文化財総合研究所株式会社に委託して実施した。
- 3 整理作業は、平成21年度に大分県教育庁埋蔵文化財センター職員の管理のもと、九州文化財総合研究所株式会社に委託して実施した。
- 4 遺物の写真撮影は原田昭一が行った。
- 5 本遺跡出土遺物、実測図、写真はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管されている。
- 6 本書の執筆・編集は、原田昭一が行った。

目次

序文・例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織の構成	1

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 歴史的環境	1
-----------	---

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要	5
第2節 遺構と遺物	5
1 土坑	5
2 溝	9
3 井戸	11
4 ビット	13
5 不明遺構	16
6 包含層出土遺物	17
7 表土出土遺物	17

第4章 総括

写真図版	21
------	----

図版目次

第1図 遺跡の位置と周辺の歴史的環境	2	第16図 SE1断面実測図	11
第2図 丹生遺跡群第14地点周辺地形図	2	第17図 SE2実測図	12
第3図 丹生遺跡群第14地点遺構配置図	3	第18図 SE3・4断面実測図	12
第4図 SK1実測図	5	第19図 SE4出土遺物実測図	12
第5図 SK2実測図	6	第20図 SP1実測図	13
第6図 SK3実測図	6	第21図 SP2実測図	13
第7図 SK1・SK2・SK3出土遺物実測図	7	第22図 SP3実測図	14
第8図 SK5実測図	8	第23図 SP4実測図	14
第9図 SK5出土遺物実測図	8	第24図 ビット出土遺物実測図①	14
第10図 SK6実測図	8	第25図 ビット出土遺物実測図②	15
第11図 SK6出土遺物実測図	9	第26図 SX1・SX2実測図	16
第12図 SD1断面実測図	9	第27図 SX1出土遺物実測図	17
第13図 SD2断面実測図	10	第28図 SX2出土遺物実測図	17
第14図 SD3・4断面実測図	10	第29図 包含層出土遺物実測図	18
第15図 SD3出土遺物実測図	10	第30図 表土出土遺物実測図	19

写真図版目次

写真図版1 遺跡全景（南西から北東を望む）、遺跡全景	25	写真図版5 SD2土層堆積状態、SD3・4完掘状態 SD3土層堆積状態、SD4土層堆積状態 SE1土層堆積状態、SE2土層堆積状態 SE2遺物出土状態、SE2完掘状態	29
写真図版2 遺跡全景（西から）、遺跡全景（東から）	26	写真図版6 SE3・4完掘状態、SP1遺物出土状態 SP2遺物出土状態、SP3遺物出土状態 SP4遺物出土状態、SX1・2遺物出土状態 SX1出土状態、SX2遺物出土状態	30
写真図版3 SK1・2・3・4完掘状態、SK1遺物出土状態 SK2遺物出土状態、SK2土層堆積状態 SK2完掘状態、SK3遺物出土状態 SK3土層堆積状態、SK3完掘状態	27	写真図版7 SK5出土遺物、SK6出土遺物、SP1出土遺物 SP2出土遺物、SP3出土遺物、SX2出土遺物 包含層出土遺物、表土出土遺物	31
写真図版4 SK4土層堆積状態、SK5遺物出土状態 SK6遺物出土状態、SK6完掘状態 SD1完掘状態、SD1土層堆積状態 SD2完掘状態、SD2完掘状態	28		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

丹生遺跡群は大分市大字丹生に所在する。遺跡の所在する大分市は大分県の中央部に位置し、近年の市町村合併により隣接する野津原町・佐賀岡町を併せて新たな大分市としてスタートした。

県道坂ノ市中戸次線は大分市の南部である戸次地区から大分市の東部である大在・坂ノ市地区へ抜ける幹線道路として利用されており、多くの車両が通行する。しかし、原道は2車線が確保されているものの、歩道の確保や大型車両の通行に支障をきたす場面もしばしばみられた。そこで大分県土木建築部は地域住民の生活の利便性をはかるために県道坂ノ市中戸次線の改良工事を実施することとなった。

丹生遺跡群については、用地取得後に試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認されたために、記録保存のための本調査を、大分県教育委員会が平成20年12月10日～平成21年1月29日の間実施した。発掘調査終了後、平成21年度、遺物整理作業を行い、報告書を刊行するに至った。

第2節 調査組織の構成

調査主体	大分県教育委員会		
現場作業 (平成20年度)	小 矢 文 則	大分県教育委員会教育長	
	佐 藤 英 一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂 本 嘉 弘	同	次長兼調査第一課長
	小 林 昭 彦	同	調査第一課一般事業担当主幹
	原 田 昭 一 (調査担当)	同	調査第二課受託事業担当主幹
整理作業 (平成21年度)	小 矢 文 則	大分県教育委員会教育長	
	佐 藤 英 一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂 本 嘉 弘	同	次長
	小 林 昭 彦	同	課長補佐
	原 田 昭 一 (調査担当)	同	受託事業担当主幹

第2章 遺跡の立地と環境

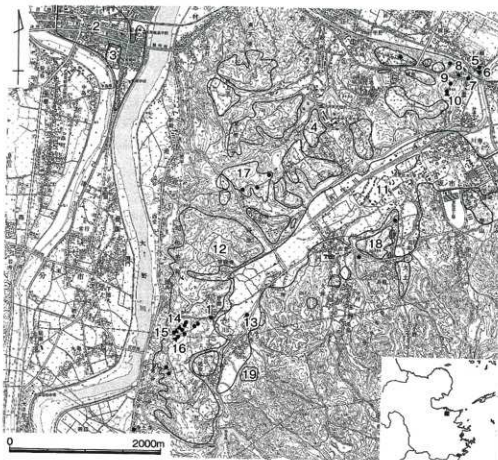
第1節 歴史的環境

丹生遺跡群は大分県大分市東部に北流する丹生川上流域の丹生台地上に位置する。今回、調査対象地とした第14地点は、丹生川流域の条里遺構を残す水田地帯を見下ろす台地の縁辺に位置する。

周辺には、前期旧石器論争で話題をよんだ丹生遺跡群が存在する。前期旧石器の存否は明らかでないが、今回の調査においても後期旧石器の石器が出土しているように、後期旧石器は確実に存在することが明らかになっている。

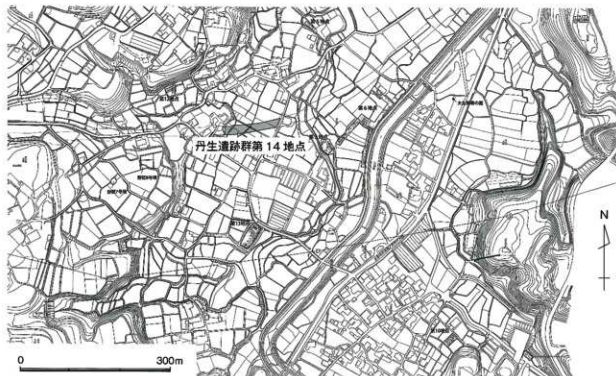
古墳時代には、丹生川下流域の台地上に県下最大級の亀塚古墳が存在し、その周辺に大小の古墳が群在する。また、丹生遺跡に近接する野間地区の台地上にも10基の前方後円墳・円墳が存在する。

古代には、亀塚古墳に近接する台地上に7世紀後半～8世紀後半に属する海部郡衙跡と推定されている城原・里遺跡が発見されている。また、同遺跡には地点を別にして部衙に先行する評価の遺構と想定できる遺跡が確認されており、丹生川が別府湾に注ぐ古代の河口付近には、豊後において非常に重要な港であった「坂門津」が存在していたと推定されている。このように、古墳時代から古代を通じて、大分県下においても非常に重要な地域であると認識できよう。また、これらの遺跡が点在する台地の南の沖積平野には条里跡が広がり、この条里跡の

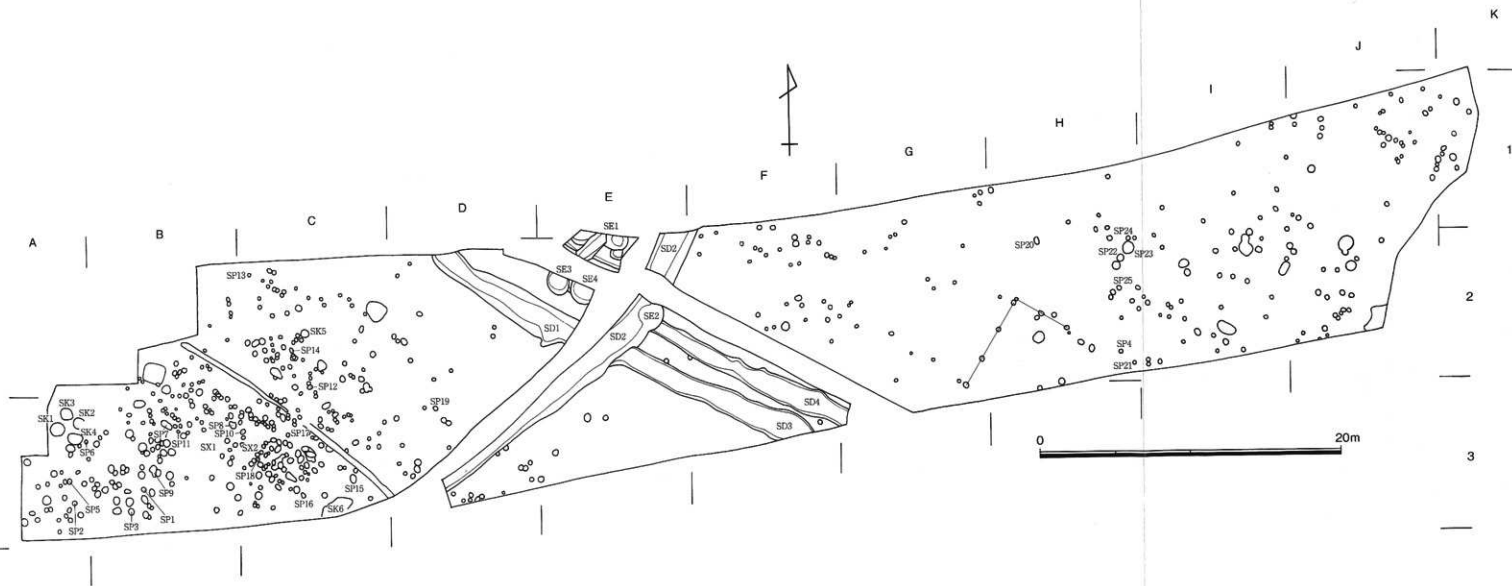


第1図 遺跡の位置と周辺の歴史的環境

- 1 丹生遺跡群(第14地点) 2 轉崎町遺跡群 3 輪崎御茶屋跡 4 城原・里遺跡 5 王ノ瀬石塚 6 王ノ瀬古墳
 7 辻2号墳 8 辻1号墳 9 小亀塚古墳 10 亀塚古墳 11 丹生川原ノ市島屋跡 12 丹生遺跡群 13 大友親寄墓
 14 野間3号墳 15 野間2号墳 16 野間1号墳 17 興遺跡 18 久土遺跡 19 上久野遺跡



第2図 丹生遺跡群第14地点周辺地形図



第3図 丹生遺跡群第14地点遺構配置図

南端に近い地点では、方形掘方をもつ掘立柱建物群も確認されているうえ、円面硯や製塩土器も出土しており、何らかの公的施設が存在していた可能性が高い。

中世には、丹生川中・上流地域一帯に丹生庄が存在したと想定されている。岡遺跡・久土遺跡・上久所遺跡・丹生川坂ノ市条里跡などの各地から掘立柱建物が発見されており、特に、丹生川坂ノ市条里跡の最も奥に位置する第9・10地点では、地域でも上位に位置する階層の生活空間が確認できている。特に目を見張るのは、丹生川坂ノ市条里跡の平野内に豊後守護職を務めた大友11代親著の墓が存在することである。大友親著の戒名にある「大忠寺」は親著の菩提寺とされ、その地名が大友親著の墓の100～200mほど北側に現在も残り、大友氏と同じように縁の深い地域であったことがわかる。

このように、旧石器時代以降、中世にいたるまで、大分県下においても非常に重要な地域であり続けたことがわかり、集落・耕作地景観が現在にまで引き継がれてきている地域もある。このような地域において、埋蔵文化財調査の手が加えられることは、非常に意義深いものがあり、また、さらなる歴史の解明につながると思える。

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査区は大分市大字丹川字原・伊佐甲に位置する。丹生川流域の丹生川坂ノ市条里跡の平野を見下ろす比高差10mの台地上に営まれる丹川集落の水田が今回の調査対象地となった。現況は比較的平坦な水田であるが、昭和30～40年代に昭和井路が引かれて水田化されたものであり、それ以前には畑地であったと伝えられている。今回の調査区の周辺では、大分市教育委員会が平成17・19年に第3・5・6・12・13地点の発掘調査を行っており、遺跡が台地上だけではなく、台地を下りた水田地帯まで広域に広がる事が確認できている(第2図)。

調査の結果、多数の柱穴のほか、土坑や溝・井戸などの遺構とともに多数の遺物が確認された(第3図)。これについて、以下で詳細を述べる。

第2節 遺構と遺物

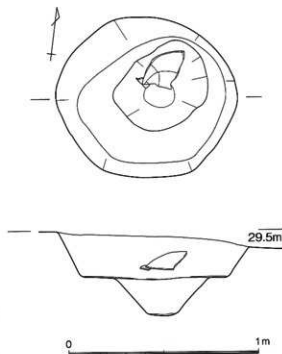
1 土坑

調査区全域から約20基の土坑が検出された。出土遺物がみられず、帰属時期が不明のものも存在するが、そのほとんどが中世～近世に営まれたものであろう。中でも、調査区の最西端にサイコロの四の目状に配置されたSK1～4の焼土坑は埋土中の遺物に接合関係がみられ、同時存在で機能していたものと考えられる。

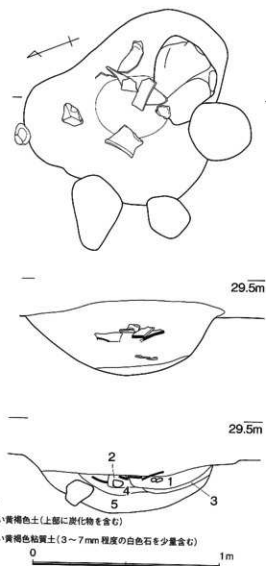
SK1 (第4・7図、写真図版3)

A-3区にSK2・3・4とともに並んで営まれている土坑である。長径95cm、短径85cm、深さ45cmを測る楕円形土坑である。遺物が土坑中央付近から出土している。

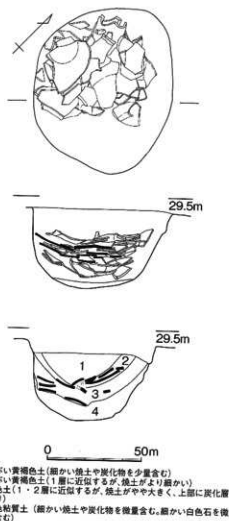
出土遺物は第7図2・3に示した。いずれもSK2・3の出土遺物と接合できたため、これらの土坑が同時併存で営まれ、それぞれに同一個体の甕の破片を廃棄したものと考えられる。2は口径48.8cm、器高51.9cmを測る土師質土器甕である。外面に指頭圧痕やナア、内面にはナアによ



第4図 SK1 実測図



第5図 SK2実測図



第6図 SK3実測図

る調整がみられる。3は口径43cmを測る備前焼甕である。

SK2 (第5・7図、写真図版3)

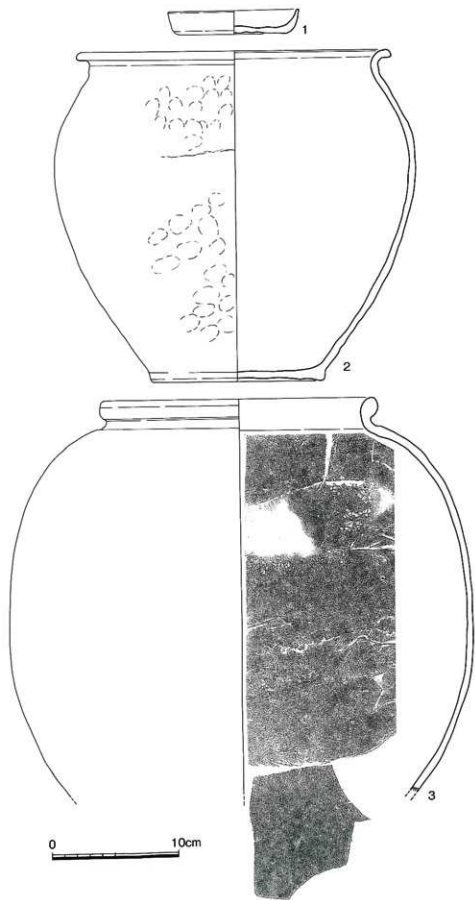
A-3区にSK1・3・4とともに並んで営まれている土坑である。径100cm、深さ30cmを測る不定形土坑である。最下層に粘質土が堆積し、そのうえに焼成した焼土層が確認でき、焼土層の上に炭が堆積している。遺物はその炭混じりの層中から出土している。

出土遺物は第7図1・2・3に示した。2・3はいずれもSK1・3の出土遺物と接合できたため、これらの土坑が同時併存で営まれ、それぞれに同一個体の甕の破片を廃棄したものと考えられる。1は口径11cm、器高2cmを測る土師質土器皿である。2は口径48.8cm、器高51.9cmを測る土師質土器甕である。外面に折頭圧痕やナデ、内面にはナデによる調整がみられる。3は口径43cmを測る備前焼甕である。

SK3 (第6・7図、写真図版3)

A-3区にSK1・2・4とともに並んで営まれている土坑である。長径75cm、短径75cm、深さ42cmを測る楕円形土坑である。最下層に粘質土が堆積し、そのうえに焼土や炭化物をわずかに含む層がみられるが、出土遺物はこの堆積土中から出土している。最上層は土器が廃棄された後の堆積土であろう。

出土遺物は第7図2・3に示した。いずれもSK1・2の出土遺物と接合できたため、これらの土坑が同時併



第7図 SK1・SK2・SK3出土遺物実測図

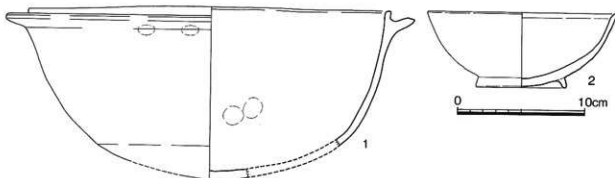
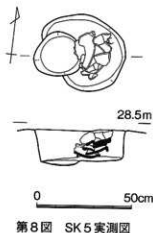
存で営まれ、それぞれに同一個体の甕の破片を廃棄したものと考えられる。2は口径48.8cm、器高51.9cmを測る土師質土器甕である。外面に指頭圧痕やナデ、内面にはナデによる調整がみられる。3は口径43cmを測る備前焼甕である。

SK4 (写真図版3・4)

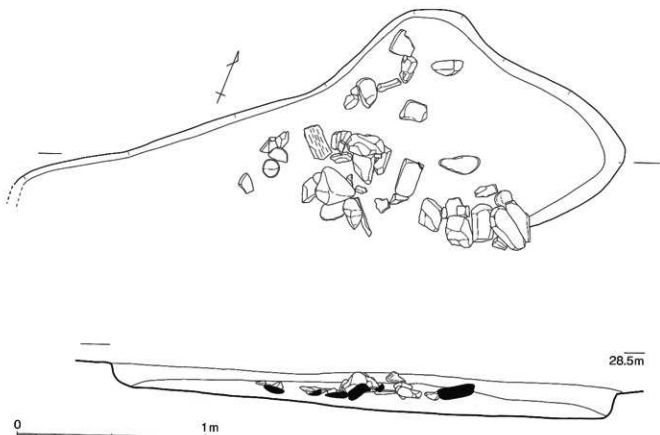
A-3区にSK1・2・3とともに並んで営まれている土坑である。長径100cm、短径70cm、深さ20cmを測る楕円形土坑である。埋土は焼土や炭を大量に含む。出土遺物について図化するものはみられなかった。

SK5 (第8・9図、写真図版4・7)

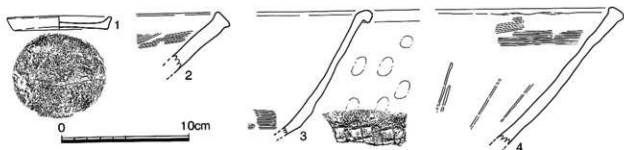
C-2区に営まれている土坑である。長径50cm、短径40cm、深さ18cmを測る不定形土坑である。土坑中央部から遺物の出土がみられた。



第9図 SK5出土遺物実測図



第10図 SK6実測図



第11図 SK6出土遺物実測図

出土遺物は第9図に示した。1は土師質土器釜であり、口縁部を内傾させた面取りを施している。2は瓦器碗である。体部中位に屈曲が認められ、貼り付けた高台は高くしっかりしている。

SK6 (第10・11図、写真図版4・7)

C-3区に営まれている土坑である。長径330cm、深さ15cmを測る不定形土坑であり、土坑の南側は調査区外に延びる。埋土中に拳大～人頭大の礫を含んでいる。

出土遺物は第11図に示した。1は口径8cm、器高1cmを測る土師質土器小皿であり、底面に回転糸切り痕がみられる。2は瓦質土器鉢、3は土師質土器鍋、4は瓦質土器鉢である。4にはスリ目が確認できるが、使用により磨滅している。

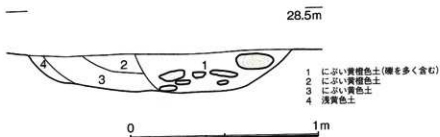
2 溝

調査区から5条の溝が確認できている。いずれも現在の水路や畦畔に近接し並行しており、これらの溝が営まれた時代の土地区画が現代まで踏襲され続けていることがわかる。

SD1 (第3・12図、写真図版4)

D・E-2区に営まれている溝である。幅120～220cm、深さ約20～30cmを測る溝であり、調査区内に現在の水田用水路が走っていたため、発掘調査がかなわず、確認ができなかったが、SD2に接するものであり、また、SD3に延びていくものと考えられる。溝床面の高さからみれば、北西から南東に流れる溝であることがわかる。調査の過程でSD1の平面プランに掘り直しのラインが確認しにくかったため1条の溝として調査を行ってしましたが、断面観察では掘り直しの土層ラインが確認でき、SD1第1段階の埋没後に、第2段階の溝が掘られたことが確認できた。第2段階のSD1の埋土中には拳大～人頭大の礫を多く含んでおり、出土遺物もほとんどこの層のものと考えられる。SD1はSD2・SD3とともに現代の水田畦畔と並行して走り、現代の土地区画に踏襲されていることがわかる。

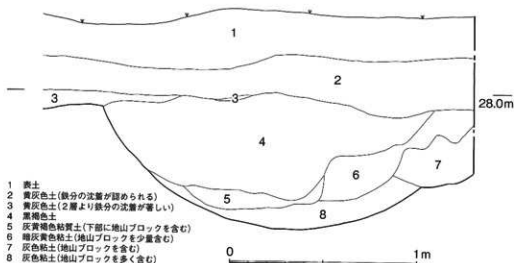
出土遺物は小量みられる。図化するものが出土しなかったが、出土遺物から14世紀代のもと考えられる。



第12図 SD1断面実測図

SD2 (第3・13図、写真図版4・5)

D・E・F-1・2・3区に営まれている溝であるが、深さ約20～30cmを測る。溝の北西側の立ち上がりについては、調査区内に現在の水田用水路が走っていたため、発掘調査がかなわず、確認が出来なかったが、幅1～3



第13図 SD2断面実測図

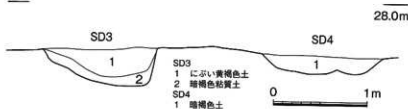
mを測るものと考えられる。その規模は南西側が狭く浅く、北東側にかけて広く深くなっており、溝床面の高さをみても、南西から北東に流れる溝であることがわかる。SD3・SD4との切りあいが確認できず、同時併存の可能性が高い。また、SD1も合流することが考えられるため、SD1・3・4の支線の流路が合流する本線の流路の機能をもつ水路であるものと考えられる。SD2はSD1・3・4とともに現代の水田畦畔と並行して走り、現代の土地区画に踏襲されていることがわかる。

出土遺物は少量みられる。図化しうるのが出土しなかったが、出土遺物から中世のものと考えられる。

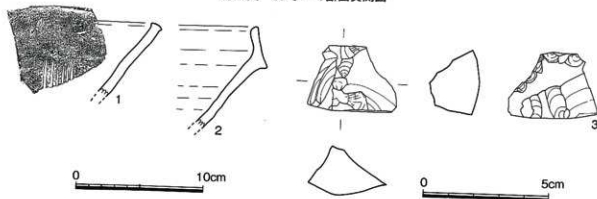
SD3 (第3・14・15図、写真図版5)

E・F-2・3区に営まれている溝である。幅約1m、深さ約25cmを測る溝である。溝床面の高さはほぼ水平であり、水成堆積層はみられない。SD4と並行して走り、同時併存の可能性が高く、また、SD1に延びる可能性がある。SD3はSD1・2・4とともに現代の水田畦畔と並行して走り、現代の土地区画に踏襲されていることがわかる。

出土遺物は少量みられ、図化しうるものを第15図に示した。1は瓦質土器指鉢、2は備前焼指鉢、3は姫島産



第14図 SD3・4断面実測図



第15図 SD3出土遺物実測図

黒曜石の抉入削器であろうか。石器をはじめ、これらの土器は埋土中に破片で混入しているものであり、SD3の帰属時期を表すものではない。

SD4 (第3・14図、写真図版5)

E・F・G-2・3区に営まれていた溝である。幅100~150cm、深さ約20cmを測る溝である。溝床面の高さはほぼ水平であり、水成堆積層はみられない。SD3と並行して走り、同時併存の可能性が高い。SD4はSD1・2・3とともに現代の水田畦畔と並行して走り、現代の土地区画に踏襲されていることがわかる。

出土遺物は少量みられる。図化しうるものが出土しなかったが、出土遺物から14世紀頃のものと考えられる。

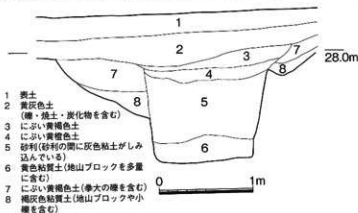
3 井戸

井戸は合計4基検出できた。いずれも、溝と切り合いをもったり、近接したりし、また、田畑のコーナ付近に位置する特徴がある。

SE1 (第3・16図、写真図版5)

E-1区に営まれている検出径120cm、深さ100cmを測る井戸である。最下層に約20cmの地山ブロック混じりの堆積層が確認でき、その上層に3cmの小石で埋められた堆積層が80cmの厚さで確認されている。この井戸はSE2・3・4とともに、現代の水田の境界付近にまともって営まれており、また、出土遺物が少ないものの、近世以降のものであることが確認できるため、用水を確保するための井戸であったことが想定できる。当地は昭和30~40年代頃に台地上に水路が引かれる以前は、畑地であり、農業用水の確保が課題であったことが伝えられている。

出土遺物は少量みられる。図化しうるものが出土しなかったが、出土遺物から近世以降のものと考えられる。



第16図 SE1 断面実測図

SE2 (第3・17図、写真図版5)

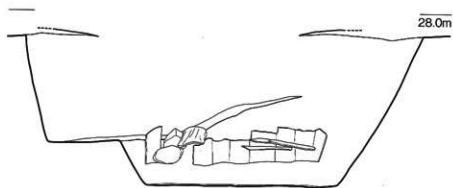
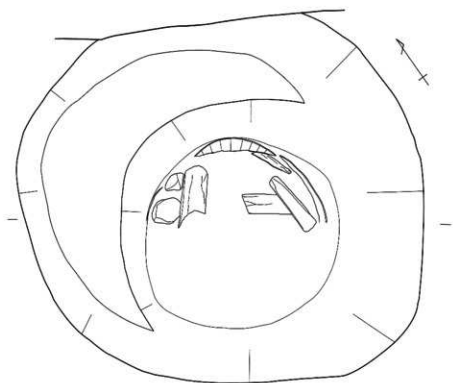
E-2区に営まれている検出径215cm、深さ80cmを測る井戸である。径90cmの井筒直が最下層で確認できた。井筒は薄い板を円形に並べた桶状のものを使用していたが、保存状態は極めて悪かった。SD2・4を切って営まれており、SE1・3・4とともに、現代の水田の境界付近にまともって営まれていた。出土遺物が少ないものの、近世以降のものであることが確認できるため、用水を確保するための井戸であったことが想定できる。

出土遺物は少量みられる。図化しうるものが出土しなかったが、近世以降のものと考えられる。

SE3 (第3・18図、写真図版6)

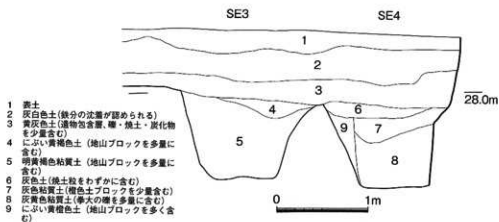
E-2区に営まれている検出径120cm、深さ80cmを測る井戸である。埋土中には地山ブロックが大量に含まれており、一気に埋め戻されたことがわかる。SE4と並んでおり、SE1・3・4とともに、現代の水田の境界付近にまともって営まれていた。出土遺物が少ないものの、近世以降のものであることが確認できるため、用水を確保するための井戸であったことが想定できる。

出土遺物は少量みられる。図化しうるものが出土しなかったが、近世以降のものと考えられる。



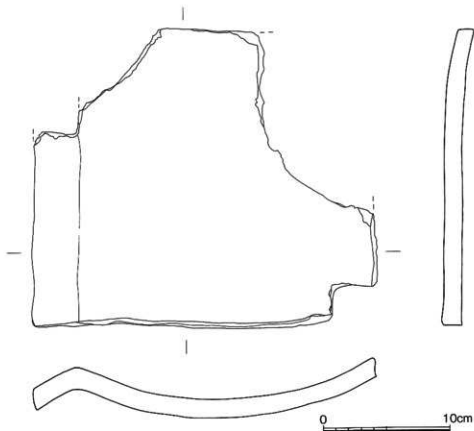
0 1m

第17図 SE2実測図



- 1 黄土
- 2 灰白色土 (鉄分の沈着が認められる)
- 3 黄灰色土 (遺物包含層、礫・焼土・炭化物を少量含む)
- 4 にぶい黄褐色土 (地山ブロックを多量に含む)
- 5 明黄褐色粘質土 (地山ブロックを多量に含む)
- 6 灰色土 (焼土粒をわずかに含む)
- 7 灰色粘質土 (褐色土ブロックを少量含む)
- 8 灰青色粘質土 (赤土の塊を多量に含む)
- 9 にぶい黄褐色土 (地山ブロックを多く含む)

第18図 SE3・4断面実測図



第19図 SE 4 出土遺物実測図

SE 4 (第3・18・19図、写真図版6)

E-2区に営まれている検出面径100cm、深さ80cmを測る井戸である。埋土中には拳大の礫が大量に含まれており、一気に埋め戻されたことがわかる。SE 3と並んでおり、SE 1・2・3とともに、現代の水田の境界付近にまとまって営まれていた。出土遺物が少ないものの、近世以降のものであることが確認できるため、用水を確保するための井戸であったことが想定できる。

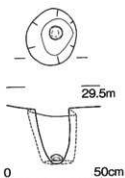
出土遺物は少量みられ、図化しうるものを第19図に示した。平瓦であり、近世以降のものである。

4 ビット

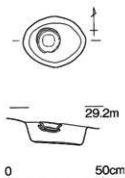
調査区全域から450基をこえるビットが調査区全域から検出されている。なかには、SP 1～4のように土器を埋納したものもみられ、何らかの祭祀を行った痕跡として捉えることができよう。柱穴であると想定できるビットも数多く認められたが、掘立柱建物の配置をもつものは確認できなかった。中には、G・H-2区において構列とも捉えられるビットの並びも確認できた。

SP 1 (第3・20・24図、写真図版6・7)

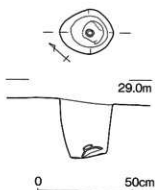
B-3区に位置する検出面径30cm、深さ28cmを測るビットである。ビットの底から完形の土師質土器小皿が1



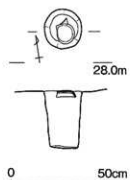
第20図 SP 1 実測図



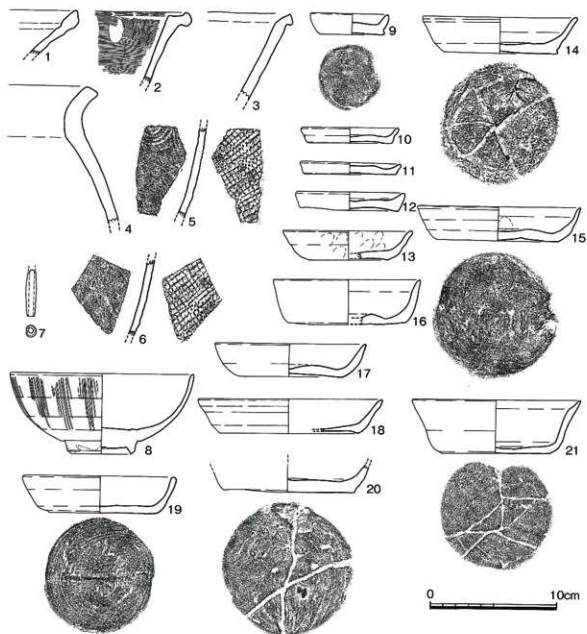
第21図 SP 2 実測図



第22図 SP 3 実測図



第23図 SP 4 実測図



第24図 ビット出土遺物実測図①

点出土している。

出土遺物は第24図11に示した。口径8.4cm、器高0.9cmを測る土師質土器小皿である。

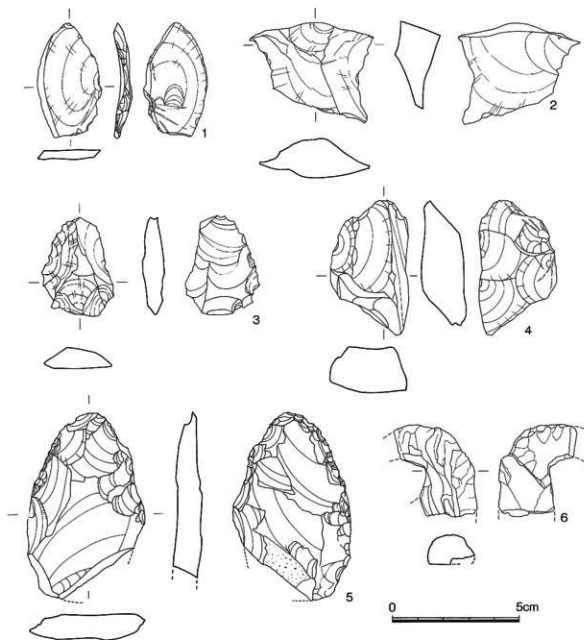
SP2 (第3・21・24図、写真図版6・7)

A-3区に位置する検出面径27~33cm、深さ10cmを測るビットである。ビットの底から6cm浮いた位置で完形の土師質土器環が2点、正置に重ねられた状態で出土している。

出土遺物は第24図14・15に示した。14は口径12.4cm、器高2.9cmを測る土師質土器環であり、底部には回転糸切り痕がみられる。15は口径12.8cm、器高2.7cmを測る土師質土器環であり、底部には回転糸切り痕の上から板状圧痕がみられる。

SP3 (第3・22・24図、写真図版6・7)

B-3区に位置する検出面径24~28cm、深さ30cmを測るビットである。ビットの底で破損した青磁碗が伏せら



第25図 ビット出土遺物実測図②

れた状態で出土している。

出土遺物は第24図8に示した。口径14.6cm、器高6.4cmを測る青磁碗である。外面に縦方向の櫛描き文がみられ、内面見込み部に重ね焼き痕が残る。高台壘付および高台内を除き、施軸されている。

SP4 (第3・23・24図、写真図版6)

G-2区に位置する検出面径20cm、深さ30cmを測るピットである。ピットの底から26cm 浮いた位置から破損した土師質土器杯が伏せられた状態で出土している。

出土遺物は第24図20に示した。底径10.4cmを測る土師質土器杯であり、底部には回転糸切り痕がみられる。

ピット出土遺物 (第24・25図)

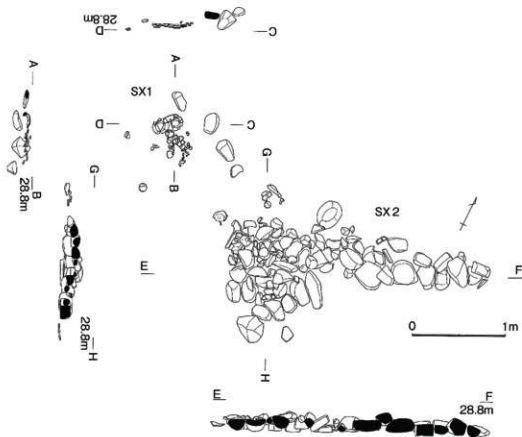
ピットからは土師質土器杯皿類が多く出土しており、完形で納められていたものも少なくない。なお、これのピット群のほとんどが中世に属するものと考えられるが、埋土中から旧石器や縄文時代の石器なども出土しており、あわせてここで紹介したい。出土した遺物は第24・25図に示した。

第24図1は東播系須恵器片口鉢である。2・3は鍋であるが、2が瓦質、3が土師質である。5・6は亀山産須恵器甕の破片であろう。外面にタタキ、内面に同心円の当具痕の上からナデが施されている。

第25図1は流紋岩製、瀬戸内技法の翼状剥片である。2はホルンフェルス製剥片である。3は姫島産黒曜石製の剥片である。4は姫島産黒曜石製の刮器であろうか。5はサヌカイト製扁平打製石斧である。6は用途不明の石製品であるが、環状に成形したものであり、破損している。唯一、中世のものであろうか。

5 不明遺構

調査区の中央よりやや西側のB・C-3区において、集石およびその周辺に土器群が検出できた。この集石およびその周辺に土器群には2か所のまとまりが認められたため、SX1・SX2として把握して調査を行った。

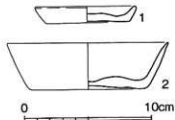


第26図 SX1・SX2実測図

SX1 (第26・27図、写真図版6)

B・C-3区のSX2の東側に位置する土器と川原石からなる集石群である。径1m程度の範囲に土器と川原石が集中している。

出土遺物は第27図に示した。1は口径8.4cm、器高1.3cmを測る土師質土器小皿であり、2は口径12.6cm、器高3.8cmを測る土師質土器杯である。両者とも器面の剥離がいちじるしく調整は不明である。



第27図 SX1 出土遺物実測図

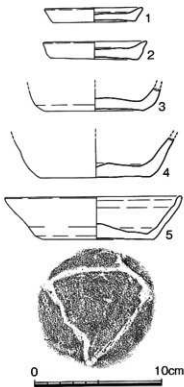
SX2 (第26・28図、写真図版6・7)

B-3区のSX1の東側に位置する集石群である。東西約3m、南北約1mの範囲に川原石を上面に平坦になるように組んでおり、西側は平面プランを方形に仕上げている。周辺から土師質土器が出土した。

出土遺物は第28図に示した。1は口径7.8cm、器高1.1cmを測る土師質土器小皿、2は口径8.3cm、器高1.5cmを測る土師質土器小皿、3は底径8cmを測る土師質土器杯、4は底径9cmを測る土師質土器杯、5は口径14.6cm、器高3.3cm、底径9cmを測る土師質土器杯である。1～4は器面の磨滅が著しく、調整が不明な点が多いが、5のみ底面にわずかに回転糸切りの痕跡が確認できる。

6 包含層出土遺物 (第29図、写真図版7)

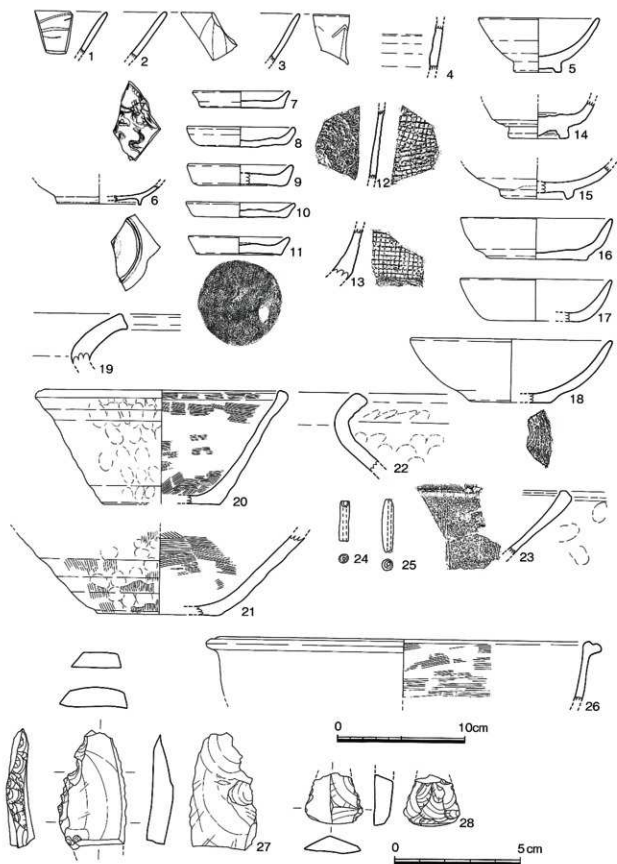
調査区B・C・D-2・3区において、遺構検出面上に包含層の広がり確認でき、包含層中から中世を中心に、それ以前の遺物が確認できた。出土した遺物は第29図に示した。1・2・3はいずれも中国龍泉系青磁碗である。1の内面には劃花文がみられ、2・3の外面には鎊連弁文がみられる。4は白磁の瓶である。5は青磁の小碗であり、高台内のみ露胎、他の内外面に軸が施こされている。6は中国景德鎮窯産青花皿である。12・13は亀山産須恵器製の破片であろう。14は磁器碗であり、高台内・疊付を含めて内外面すべてに薬灰軸を施こしており、疊付には砂目痕が確認できる。15は白磁碗である。内外面に施軸し、疊付のみ露胎である。18は瓦器碗である。底部に回転糸切り痕がみられる。東国東型瓦器碗であろう。20・21は瓦質こね鉢であり、23は瓦質摺鉢である。26は土師質土器鍋である。27は流紋岩製磨製削器、28は鉅島産黒曜石の石鏃の未成品であろう。



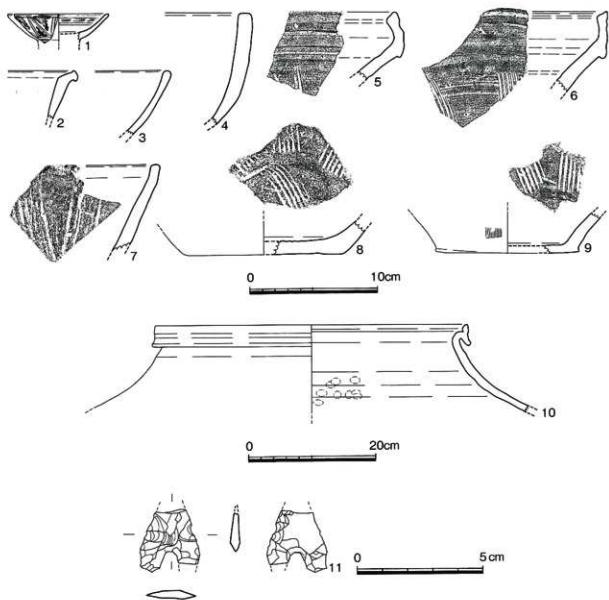
第28図 SX2 出土遺物実測図

7 表土出土遺物 (第30図、写真図版7)

調査区全域の表土掘削において、採集された遺物を第30図に示した。1は青花の杯である。2は土師質土器鍋、3は瓦質土器であり、坏状の形態をもつ。4は瓦質土器の鉢である。5・6は備前焼摺鉢、7・8・9は瓦質摺鉢である。10は常滑焼の甕である。



第29回 包含層出土遺物実測図



第30図 表土出土遺物実測図

表1 遺物観察表(土器)

探検 番号	遺物 番号	種類	図様	注量(単位:cm)		図録	調査	備考	出土遺構
				口径	底径				
7	1	土師質土師	皿	(10.2)	(8.6)	1.9	器面の遺跡がいちどしく不明		SK2
7	2	土師質土師	皿	(48.8)	(47.6)	11.9	外周に指子やスリ目がある。内面:ヨコナテ		SK1, SK2, SK3
7	3	高麗	木筒蓋	(43.0)	—	63.4	外周にハタテ状の指子がある。内面:多方向のハタ目		SK1, SK2, SK3
9	1	土師質土師	皿	32.1-32.8	—	13.6	内外周ともハタ目がある。外周にスリ目がある		SK2
9	2	高麗	鉢	(14.8)	(7.2)	6.0	内外周ともハタ目がある		SK5
11	1	土師質土師	皿	8.2	7.4	1.0	外周:ヨコナテ。内面:ハタ目		SK6
11	2	土師質土師	皿	—	—	—	外周:ヨコナテ。内面:横線状。内周:横方向のハタ		SK6
11	3	土師質土師	皿	—	—	—	外周:ヨコナテ。指線状。内周:横線状。内面:ヨコナテ		SK6
11	4	瓦質土師	椀鉢	—	—	—	外周:ヨコナテ。内面:横線状。内周:ヨコナテ。スリ目があるが使用により消失		SK6
15	1	瓦質土師	椀鉢	—	—	—	外周:ヨコナテ。指線状。内周:ヨコナテ。スリ目		SK3
15	2	高麗	—	—	—	—	外周:ヨコナテ。内周:ヨコナテ		SK1
24	1	瓦質土師	片口鉢	—	—	—	外周:ヨコナテ。内周:ヨコナテ		SK14
24	2	瓦質土師	鉢	—	—	—	外周:横線状。内周:横方向のハタ目		SK4
24	3	土師質土師	鉢	—	—	—	外周:ヨコナテ。内周:ヨコナテ		SK10
24	4	瓦質土師	鉢	—	—	—	外周:タテ目。内面:ヨコナテの当耳部の上からナテ		SK15
24	5	高麗	鉢	—	—	—	外周:タテ目。内面:ヨコナテの当耳部の上からナテ		SK19
24	6	高麗	鉢	—	—	—	外周:タテ目。内面:ヨコナテの当耳部の上からナテ		SK19
24	8	高麗	鉢	(14.6)	4.6	6.4	外周:タテ目。内面:ヨコナテ。内周:ヨコナテ。当耳部の上からナテ		SK19
24	9	高麗	鉢	(6.3)	5.4	1.2	外周:ヨコナテ。内周:ヨコナテ		SK22
24	10	土師質土師	皿	(7.8)	(6.6)	1.2	器面の遺跡がいちどしく不明		SK10
24	11	土師質土師	皿	(7.8)	(7.3)	0.5-1.0	器面の遺跡がいちどしく不明		SK10
24	12	土師質土師	皿	8.7	7.4	1.3	器面の遺跡がいちどしく不明		SK18
24	13	土師質土師	皿	(10.2)	(6.2)	2.3	外周:ヨコナテ。内面:横線状。内周:ヨコナテ。指線状		SK9
24	14	土師質土師	皿	13.4	9.0	2.9	器面の遺跡がいちどしく不明		SK2
24	15	土師質土師	皿	12.9	9.7	3.3	外周:ヨコナテ。内面:ヨコナテ。当耳部の上からナテ		SK1
24	16	土師質土師	皿	(11.8)	(9.2)	3.6	器面の遺跡がいちどしく不明		SK18
24	17	土師質土師	皿	(12.0)	(8.0)	2.6	器面の遺跡がいちどしく不明		SK7
24	18	土師質土師	皿	(14.6)	(11.0)	2.8	外周:ヨコナテ。内面:ヨコナテ。当耳部の上からナテ		SK17
24	19	土師質土師	皿	16.2	11.5	3.0	外周:ヨコナテ。内面:ヨコナテ。当耳部の上からナテ		SK4
24	20	土師質土師	皿	10.7	—	—	器底:指線状		SK4
24	21	土師質土師	皿	(13.4)	(9.0)	4.3	器底:指線状		SK1

表2 遺物観察表(土器)

図版番号	遺物番号	種類	器種	寸法(単位:cm)			調査	備考	出土遺構
				口径	高さ	厚さ			
27	1	土師質土器	皿	8.0	6.6	1.4	器底の割線がいちじろしく不明		SK1
27	2	土師質土器	杯	112.8	9.2	3.7	器底の割線がいちじろしく不明		SK1
28	1	土師質土器	皿	7.8	6.6	1.1	器底の割線がいちじろしく不明		SK2
28	2	土師質土器	皿	8.3	7.0	1.5	器底の割線がいちじろしく不明		SK2
28	3	土師質土器	杯	—	(8.0)	—	器底の割線がいちじろしく不明		SK2
28	4	土師質土器	杯	—	9.0	—	器底の割線がいちじろしく不明		SK2
28	5	土師質土器	杯	14.0	8.7	3.5	底部:同軸糸切り		SK2
29	1	青磁	碗	—	—	—	内面:割花文	中国(龍泉窯)	B3区包含層
29	2	青磁	碗	—	—	—	外面:割花文	中国(龍泉窯)	B3区包含層
29	3	青磁	皿	—	—	—	外面:割花文	中国(龍泉窯)	B3区包含層
29	4	青磁	小碗	9.6	3.6	4.3	高台内のみ露出、他の内外面は施釉	中国(龍泉窯)	B3区包含層
29	5	青磁	皿	—	(6.6)	—	—	中国(龍泉窯)	B3区包含層
29	7	土師質土器	皿	7.8	6.6	1.4	器底の割線がいちじろしく不明		B3区包含層
29	8	土師質土器	皿	(8.4)	—	1.6	器底の割線がいちじろしく不明		B3区包含層
29	9	土師質土器	皿	(8.4)	(6.6)	1.7	器底の割線がいちじろしく不明		B3区包含層
29	10	土師質土器	皿	(8.5)	(7.2)	1.2	器底の割線がいちじろしく不明		C2区包含層
29	11	土師質土器	皿	(8.4)	(6.6)	1.7	底部:同軸糸切り		B3区包含層
29	12	灰土器	壺	—	—	—	外面:タナキ、内面:同心円の器具状の上からナデ	亀山窯	B3区包含層
29	13	灰土器	壺	—	—	—	外面:タナキ、内面:同心円の器具状の上からナデ	亀山窯	B3区包含層
29	14	灰土器	碗	—	(4.6)	—	—	亀山窯	B3区包含層
29	15	白磁	碗	—	(5.0)	—	僅かなり露出あり、他の内外面は施釉		壺巻層
29	16	土師質土器	杯	12.0	8.2	3.4	外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ	中国	B3区包含層
29	17	土師質土器	杯	112.0	(7.4)	3.3	器底の割線がいちじろしく不明		B3区包含層
29	18	瓦質土器	碗	(16.0)	(6.4)	5.0	外面:丁寧なヨコナデ、内面:丁寧なヨコナデ、底部:同軸糸切り	東国製瓦器	B3区包含層
29	19	瓦質土器	壺	—	—	—	外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ		B3区包含層
29	20	瓦質土器	之形鉢	(18.6)	(9.2)	9.0	外面:ヨコナデのハケ目、内面:指頭庄・ナデ		B3区包含層
29	21	瓦質土器	之形鉢	—	(9.8)	—	外面:ヨコナデのハケ目、内面:指頭庄・縦方向のハケ目		B3区包含層
29	22	瓦質土器	壺	—	—	—	外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ		B3区包含層
29	23	瓦質土器	樽鉢	—	—	—	内面:タテ方向のすり目		B3区包含層
29	26	土師質土器	鉢	(31.6)	—	—	内面:横方向のハケの後にナデ		D2区包含層
30	1	青花	杯	(8.0)	—	—	—		B3区包含層
30	2	土師質土器	樽	—	—	—	外面:ナデ、指頭庄、内面:ナデ		表土
30	3	瓦質土器	杯?	—	—	—	外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ		表土
30	4	瓦質土器	鉢	—	—	—	器底の割線がいちじろしく不明		表土
30	5	陶器	樽鉢	—	—	—	内面:タテ方向のすり目	備前焼	表土
30	6	陶器	樽鉢	—	—	—	内面:タテ方向のすり目	備前焼	表土
30	7	瓦質土器	樽鉢	—	—	—	内面:タテ方向のすり目		表土
30	8	瓦質土器	樽鉢	—	—	—	内面:タテ方向のすり目		表土
30	9	瓦質土器	樽鉢	—	—	—	内面:タテ方向のすり目		表土
30	10	陶器	壺	(50.0)	—	—	外面:ヨコナデ、内面:ヨコナデ・指頭庄	備前焼	表土

表3 遺物観察表(石器)

図版番号	遺物番号	品名	材質	寸法(単位:cm)			重量(g)	備考	出土遺構		
				長さ	幅	厚さ					
15	3	鉄入銅器(使用痕あり)	耶麻呂黒曜石	長さ	2.6	幅	3.5	厚さ	2.0	13.9	SD3
26	1	観内内径位の貫通銅片	黄銅	長さ	3.5	幅	2.5	厚さ	0.4	7.1	SP10
26	2	銅片	ホムンフェルス	長さ	3.4	幅	4.9	厚さ	1.6	21.4	SP13
26	3	銅片	耶麻呂黒曜石	長さ	3.8	幅	2.8	厚さ	0.8	9.0	SP20
26	4	銅器?	耶麻呂黒曜石	長さ	5.3	幅	3.1	厚さ	1.7	28.5	SP22
26	5	扁平打製石斧	ナメカイト	長さ	6.75	幅	4.8	厚さ	1.2	43.6	SP26
26	6	用途不明		長さ	3.4+α	幅	2.2	厚さ	1.1	13.7	SP6
27	27	銅製銅器	黄銅	長さ	4.5	幅	2.7	厚さ	0.9	15.0	B2区包含層
29	28	石鏃(完成品)	耶麻呂黒曜石	長さ	2.0+α	幅	2.2	厚さ	0.7	3.3	B3区包含層
30	11	石器		長さ	2.35+ε	幅	2.4	厚さ	0.35	2.3	表土

表4 遺物観察表(瓦)

図版番号	遺物番号	品名	部位	寸法(単位:cm)			備考	出土遺構			
				長さ	幅	厚さ					
19	1	平瓦		長さ	23.5	幅	27.3	厚さ	1.5		SB4

表5 遺物観察表(土製品)

図版番号	遺物番号	品名	部位	寸法(単位:cm)			重量(g)	備考	出土遺構		
				長さ	幅	孔径					
24	7	土師	土師質	長さ	3.7+α	幅	0.8	孔径	0.8	3.3	SP12
29	24	土師	土師質	長さ	3.2	幅	0.8	孔径	0.7	2.0	B3区包含層
29	25	土師	土師質	長さ	4.1	幅	0.9	孔径	0.9	3.3	D3区包含層

第4章 総括

今回の発掘調査において、ピット・土坑・溝からなる中世の良好な遺跡の広がりが確認できた。これらの遺構群は南北朝期を中心に平安時代末から室町期まで継続して営まれているものである。ピットに関しては、450基以上が調査区全域から検出され、中にはSP1~4のように土器を埋納したのもみられ、何らかの祭祀行為を想定できるものも存在する。柱穴であると考えられるピットも数多く認められ、櫛列の可能性を想定できる並びが2列確認できたが、掘立柱建物としての配置をもつものは確認できなかった。土坑に関しては、約20基の土坑が検出できたが、そのほとんどが中世に営まれたものであろう。中でも、調査区の最西端にサイコロの四の目状に配置されたSK1~4の焼土坑は埋土中の遺物に接合関係がみられ、同時存在で機能していたものと考えられる。SK1~4の土坑群は埋土中に焼土層が確認でき、焼土層の上に炭や灰が堆積する焼土坑であるという共通の様相がみられた。出土遺物も要領であることは、この焼土坑の機能を物語っているものと思えるが、今回の調査において明確な機能は導き出しえなかった。

これらのピット・土坑群に伴い、5条の溝が確認できている。これらの溝には切り合いが認められず、形状や規模からみて、SD2が幹線溝であり、その他の溝が、これにとりつく支線溝になる可能性が高いものと思われる。地形に伴い、南西から北東に、また、北西から南東にそれぞれ流下するものと考えられる。いずれも現在の水路や畦畔に近接し並行しており、平安時代末から室町期まで継続した遺構群が廃絶して以降も、これらの溝が営まれた時代の土地区画が現代まで踏襲され続けていることは、興味深い。

14世紀代を中心とした遺構群が消滅して以降、中世の遺構は全く検出されていない。しかし、包含層や表土中から16世紀後葉の遺物が少量出土しているため、調査区内や周辺部において当該期の遺構が存在する可能性が残る。けれども、戦国期以降は耕作地化された可能性が高く、土地区画の境界付近に近世以降に営まれた井戸群が確認されている。昭和30~40年代頃に台地上に水路が引かれる以前は、発掘調査区周辺は畑地であり、農業用水の確保が課題であったことが伝えられており、これらの井戸は農業用水のための灌漑用井戸であったものと考えられよう。

それでは、近年、発掘調査が進んだ丹生遺跡群全体の中で第14地点の歴史的な位置付けを行ってみたい。周辺では大分市教育委員会が13次にわたって調査の手を加えている（大分市教育委員会 2009）が、第14次調査区の西方約150mの第12次調査区において、13世紀代の包含層が確認されている。また、第14次調査区の南方約200mの第13次調査区において、14世紀代の掘立柱建物群・櫛列群が確認されている。第13次調査区の掘立柱建物群・櫛列群は主軸がN40~60°Wであり、第14次調査区の櫛列と近似した方位を示し、同一生活空間ではないものの、一連の方位性をもつ同一集落とみて差支えないものと考えられる。第13・14次調査区と同一の微高地上には、さらに集落の広がりが確認できるものと想定できる。第14次調査区の南西側には「堀ノ内」の小字名が残り、地名と考古学的な成果の照合も今後の検討課題となろう。また、微高地を下りた平野部においても、第3・5・6地点において、13~14世紀の遺構群が確認されている。しかし、掘立柱建物の方位性をみてみると、第13・14次調査区とは異なることがわかる。

いずれにせよ、第14次調査区と大分市教育委員会が行ってきた丹生遺跡群・丹生川坂ノ市条里跡の調査成果とを照らし合わせてみた場合、14世紀代、および、それを若干前後する時期の遺跡は、第14次調査区周辺に集中する。大分県下全域をみても、この地域ほど14世紀代の集落の広がり・密度をもつ遺跡は認められないものと考えられる。一般的に中世村落を概観すると、12~13世紀に現代、水田化されている沖積平野において散村の形態をとるものから、14世紀ごろに微高地上に上がり、集村化の道をあゆみ、15~16世紀には連続した方形区画の溝に囲まれた生活空間へと変化するものと考えられる。14世紀に集村化への動きがみられるものと推測はされてきたが、明確にそのイメージがつかめる調査成果はないものと思える。当該地の調査が今後進むことにより、14世紀の集落の実態というもの、さらに明らかになってくることであろうし、それを期待したい。

註

大分市教育委員会『丹生川坂ノ市条里跡 丹生遺跡群』2009

表6 遺構一覧表

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載項
SK1	S047	土坑	A-3区	14世紀	焼土坑、SK2・3・4と並置	5
SK2	S142	土坑	A-3区	14世紀	焼土坑、SK1・3・4と並置	6
SK3	S143	土坑	A-3区	14世紀	焼土坑、SK1・2・4と並置	6
SK4	S060	土坑	A-3区	14世紀	焼土坑、SK1・2・3と並置	8
SK5	S061	土坑	C-2区	12世紀後葉～13世紀		8
SK6	S169	土坑	C-3区	14世紀前半～中葉		9
SD1	S150・151	溝	D・E-2区	14世紀?	SD3と同一の可能性あり	9
SD2	S165・168	溝	D・E・F-1・2・3区	中世		9
SD3	S166	溝	E・F-2・3区	14世紀	SD1と同一の可能性あり	10
SD4	S167	溝	E・F・G-2・3区	14世紀		11
SE1	S157	井戸	E-1区	近世以降?	農業灌漑用溜井?	11
SE2	S158	井戸	E-2区	近世以降?	農業灌漑用溜井?	11
SE3	S163	井戸	E-2区	近世以降?	農業灌漑用溜井?	11
SE4	S164	井戸	E-2区	近世以降	農業灌漑用溜井?	13
SP1	S085	ピット	B-3区	14世紀後半		13
SP2	S110	ピット	A-3区	13世紀後半～14世紀前半		15
SP3	S111	ピット	B-3区	14世紀?		15
SP4	S153	ピット	H-2区	13世紀		16
SP5	S139	ピット	A-3区	14世紀		16
SP6	S045	ピット	A-3区	中世		16
SP7	S131	ピット	B-3区	14世紀		16
SP8	S058	ピット	B-3区	14世紀中葉～後半		16
SP9	S035	ピット	B-3区	13世紀後半		16
SP10	S068	ピット	B-3区	14世紀		16
SP11	S079	ピット	B-3区	14世紀		16
SP12	S011	ピット	C-2区	中世?		16
SP13	S064	ピット	C-2区	中世?		16
SP14	S081	ピット	C-2区	14世紀前半		16
SP15	S078	ピット	C-3区	14世紀		16
SP16	S120	ピット	C-3区	中世		16
SP17	S160	ピット	C-3区	14世紀		16
SP18	S197	ピット	C-3区	14世紀		16
SP19	S052	ピット	D-3区	14世紀		16
SP20	S176	ピット	H-2区	中世		16
SP21	S177	ピット	H-2区	14世紀後葉～15世紀前葉		16
SP22	S178	ピット	H-2区	14世紀		16
SP23	S179	ピット	H-2区	中世		16
SP24	S180	ピット	H-2区	14世紀		16
SP25	S188	ピット	H-2区	中世?		16
SX1	S154	集石遺構	B・C-3区	14世紀後半～15世紀前半		17
SX2	S155	集石遺構	B-3区	14世紀後半～15世紀前半		17

写 真 图 版



遺跡全景
(南西から北東を望む)



遺跡全景



遺跡全景 (西から)



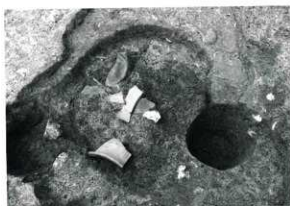
遺跡全景 (東から)



SK 1・2・3・4完掘状態



SK 1遺物出土状態



SK 2遺物出土状態



SK 2土層堆積状態



SK 2完掘状態



SK 3遺物出土状態



SK 3土層堆積状態



SK 3完掘状態

写真図版 4



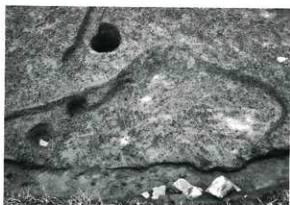
SK 4 土層堆積狀態



SK 5 遺物出土狀態



SK 6 遺物出土狀態



SK 6 完掘狀態



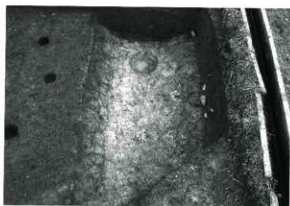
SD 1 完掘狀態



SD 1 土層堆積狀態



SD 2 完掘狀態



SD 2 完掘狀態



SD2 土層堆積狀態



SD3・4 完掘狀態



SD3 土層堆積狀態



SD4 土層堆積狀態



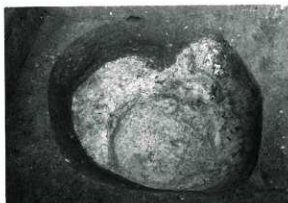
SE1 土層堆積狀態



SE2 土層堆積狀態



SE2 遺物出土狀態



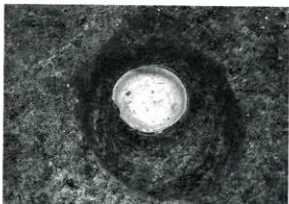
SE2 完掘狀態



SE 3・4 完掘状態



SP 1 遺物出土状態



SP 2 遺物出土状態



SP 3 遺物出土状態



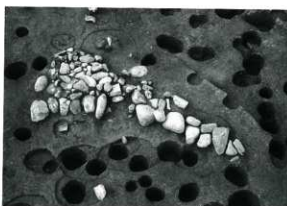
SP 4 遺物出土状態



SX 1・2 遺物出土状態



SX 1 遺物出土状態



SX 2 遺物出土状態



SK 5 出土遺物 (第9図2)



SK 5 出土遺物 (第9図1)



SK 6 出土遺物 (第11図1)



SP 1 出土遺物 (第24図11)



SP 2 出土遺物 (第24図14)



SP 2 出土遺物 (第24図15)



SP 3 出土遺物 (第24図8)



SX 2 出土遺物 (第28図5)



SX 2 出土遺物 (第28図2)



包含層出土遺物 (第29図5)



包含層出土遺物 (第29図7)



包含層出土遺物 (第29図11)



包含層出土遺物 (第29図8)



包含層出土遺物 (第29図16)



包含層出土遺物 (第29図20)



表土出土遺物 (第30図10)



表土出土遺物 (第30図1)

報 告 書 抄 録

ふりがな	にういせきぐん (だい14ちてん)							
書名	丹生遺跡群 (第14地点)							
副書名	県道坂ノ市中戸次線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	原田昭一							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
丹生遺跡群 (第14地点)	大分市大字丹川 字原・伊佐甲	322	201188	33° 12′ 25″	131° 42′ 28″	081210~ 090129	1300	県道坂ノ市 中戸次線 道路改良事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
丹生遺跡群 (第14地点)	集落	旧石器 中世	溝・土坑・井戸・ 柱穴	土師質土器・瓦質土 器・陶磁器・石器				
要約	<p>今回の発掘調査において、ピット・土坑・溝からなる南北朝期を中心にした良好な遺跡の広がりが確認できた。とりわけ溝については、現在の水路や畦畔に近接し並行しており、南北朝期を中心にした遺構群が廃絶して耕作地化して以降も、これらの溝が営まれた時代の土地区画が現代まで踏襲され続けていることは、興味深い。</p> <p>第14次調査区の南方約200mの第13次調査区において、14世紀代の掘立柱建物群・横列群が確認されている。両者の掘立柱建物群・横列群は主軸が近似した方位を示し、同一生活空間ではないものの、一連の方位性をもつ同一集落とみて差支えないものと考えられ、第13・14次調査区と同一の微高地上には、さらに集落の広がりが確認できるものと想定できる。</p>							

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第52集

丹生遺跡群 (第14地点)

県道坂ノ市中戸次線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010 (平成22) 年3月31日

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL097-597-5675

印刷 佐伯印刷株式会社
〒870-0844 大分市古国府1155-1
TEL097-543-1211